

氏 名（本籍）	ふな おか ひろ ゆき 船 岳 紘 行（岡 山 県）		
学 位 の 種 類	博 士（芸 術 学）		
学 位 記 番 号	博 甲 第 5440 号		
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学 位 論 文 題 目	カラヴァッジオの作品における「クローズアップの手法」が絵画空間にもたらす効果についての研究		
主 査	筑波大学教授	博士（芸術学）	岡 崎 昭 夫
副 査	筑波大学教授		玉 川 信 一
副 査	筑波大学准教授	博士（芸術学）	仏 山 輝 美
副 査	筑波大学准教授	博士（芸術学）	石 崎 和 宏

論 文 の 内 容 の 要 旨

（目的）

カラヴァッジオ作品の「クローズアップの手法」は先行研究においても既に注目され、その手法が重要なモチーフに鑑賞者の視線を集中させる効果や主題を演出する効果などを持っていることが指摘されている。しかしその手法自体が絵画空間に及ぼす効果や絵画空間と現実空間との強い関係性に及ぼす影響についてはほとんど触れられていない。

本研究の目的は、カラヴァッジオ作品の絵画空間に「クローズアップの手法」がどのように用いられどのような効果をもたらしているのかを作品を通して分析し、その手法が描かれた事物とそれを取り巻く空間や絵画空間上のイメージを現実空間に拡げる役割を担っていることを検証した上で、制作実践を行い、その成果を絵画表現のための方法論として提示することである。

（対象と方法）

ジュリオ・マンチーニ（Giulio Mancini, 1558～1630、イタリア）、ジョヴァンニ・バリオーネ（Giovanni Baglione, 1578～1644、イタリア）、ジョヴァンニ・ピエトロ・ベッローリ（Giovanni Pietro Bellori, 1613～96、イタリア）の「三大伝記」や、アンドレ・フェリビアン（Andore Felibien, 1619～95、フランス）、ロジャー・フライ（Roger Eliot Fry, 1866～1934、イギリス）、リオネッロ・ベントゥーリ（Lionello Venturi, 1855～1961、イタリア）から宮下規久朗、石鍋真澄、三好徹、岡田温司などの、現在に至るまでの先行研究によるカラヴァッジオの評価を分類し、造形的な視点による作品分析の必要性と表現方法としてのクローズアップが絵画空間に及ぼす影響を検証する。

第1章は、先行研究において「クローズアップ」という用語がどのような意味で用いられ、どのような絵画作品に適用されているかをまとめ、その変遷と、絵画史上のカラヴァッジオのクローズアップの位置づけを行う。

第2章は、カラヴァッジオの全作品から「クローズアップの手法」が用いられた作品を全て挙げ、様々な視点から形式分類を行い、その結果と制作年代を照らし合わせることで表現の展開を概観する。さらに先行研究にも触れられている素描を基にした従来の制作方法とは異なるカラヴァッジオの制作方法についての検

証とその独自性について考察する。

第3章では、第2章の分類結果を元に、主題の内容を確認したうえで「クローズアップの手法」が用いられた全ての作品を「ローマ前期」「ローマ後期」「逃亡時代」の時代区分に従い分析を行う。画家と描く対象との距離、「クローズアップの手法」と短縮法の関係性による絵画空間の強化、描く事物の配置による奥行きを持つ三次元的構造の表出、光の操作、フレーミング、背景処理による奥行きの限定などの条件によって、フレームすなわち描かれた矩形のキャンバスの内側で完結することのない絵画空間の構造を実現させているとし、そこにカラヴァッジオ以前の画家の作品にはなかった空間表現の独自性があるとしている。また、これらの条件は1点の作品を構成するだけでなく、作品が設置される展示空間の状況を想定して行われる場合もあり、鑑賞される際の画面の角度や視点の高さ、礼拝堂の明るさや光の方向などを考慮して構図を決定することで、絵画空間に描かれた登場人物を現実空間へ解放し、主題をより直接的に伝達するリアリティを獲得しているとする。

第4章では、著者の「クローズアップの手法」の制作実践としての作例を挙げ、描かれたイメージを絵画空間から現実空間へ上げる表現の具体的な成果を示している。

(結果)

カラヴァッジオ以前と以降の「クローズアップの手法」の違いを明らかにし、絵画空間の独自性とその表現の実現のための条件を明確に示した。

制作実践においては、研究成果としての制作方法論に基づき、特に絵画空間と現実空間（展示空間）の関連性を強めることを意図した制作を試み、一定の評価を得ている。

(考察)

カラヴァッジオ作品における先行研究では、画家が素描を基にして本画を構想・制作するそれまでの方法と異なり、アトリエ内に再現された主題世界としての実際のモデルを直接見て描いたとされる彼の制作方法によって、カラヴァッジオ以前の表現とは全く異なる絵画空間の強化が行われたとされている。その「クローズアップの手法」を適用した独自の制作方法は、対象により近接した視点を絵画空間に取り入れることも意味する。そして画家の視点が描かれる対象に近づくことは、鑑賞者の視点を絵画空間に取り込む作用がより強まるという結果に繋がる。このことは実現には、事物（モデル）の配置、光の操作、フレーミング、背景処理による奥行きの限定という周到な行為が必要であり、カラヴァッジオはそれを行った。このことを制作方法論として確立し絵画表現に適用することが、現代においても有用な表現様式となりうることを証明している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

カラヴァッジオの「クローズアップの手法」に着目し、その独自性や展開の可能性に言及する本論文は、先行研究による形式分類に基づく作品の詳細な分析と検証に裏付けられている。更には、特に教会内部に設置された絵画作品の空間と現実空間の関係性を、実際に現地へ赴き制作者の観点からクローズアップの手法や短縮法に基づいて分析検証している。また、クローズアップを適用されていない後期のカラヴァッジオ作品についても、等身大の人物表現、フレーミングや背景処理による奥行きの限定という描画行為によって設置された空間と関連付けられ、強いリアリティを獲得していることを確認している。

本論の考察は、関連する内外の文献を渉猟したうえで、カラヴァッジオの「クローズアップの手法」を直接的に絵画空間に関連付けるとともに、現地調査によって確認されたものである。このことによって明らかにされたカラヴァッジオの絵画空間の独自性とその応用としての著者の制作実践は、現代の絵画表現においても汎用性が高く、他の画家の指針になるとともに、制作方法論の学術的発展に資するものである。著者の

制作発表活動が、継続的に一定の評価を得ていることもそれを裏付けるものであり、今後の更なる発展に期待したい。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。